
みちのくラーメン わらべうた

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みちのくラーメン わらべうた

【Nコード】

N6579H

【作者名】

水色ペンキ

【あらすじ】

都会の一隅で小さなラーメン店を営む私。ほとんど客はやってこないが、不思議と何とかなっている。しかしこの店の近所には、どうやらもっと流行っている店があるらしい。

ぶった切ったような怒号で目を覚ました。激しい雨に水たまりを踏むびしゃびしゃいう音が混じって、深夜の路地は冷たく沸き立ちかけている。3人、4人……私は布団の中で人数を数えた。喧嘩か？ どうでもいい。続く怒声。溜息が出る。仰向けに見上げると、カーテンのない窓に稲妻のような雨垂れが走っていて、都会の埃を吸った水は、外灯の光に白く脈々と輝いていた。そこに一瞬、鳥の翼のような黒い影がよぎった。

喧噪が消えた。

私は布団から起き上がると、そつと窓から外を窺った。浴びせかけるような雨に打たれて、泥の上に二人の男が横たわっている。地面はあばたのような水たまりを作り、古い魚のように平たく弛緩した二人の間を、いまにも呑み込まんばかりだ。白熱灯の光が、いかにも弱々しくこの光景を覆っていた。男らの衣類が雨粒を受けて餌を求める下等生物の体のように震えているのが見て取れた。

ふと私は手前の男のさらに手前、雨滴に沸く水たまりの上で、一枚の紙片が水すましのようには回転しているのに気がついた。

私は遠目にもそれがなんであるか、すぐにわかった。

「みちのくラーメン わらべうた」のサービスチケットだ。

暗い暗い水の中を泳いでいる。頭上につけた水中ライトの光だけが、この闇を照らす唯一の手がかりだ。褪せた桃色の珊瑚をかき分け、私はある構造物に辿り着く。フジツボだらけの鉄板……沈船の一部だ。

私はパールを取り出すと、ハッチにとりついてこじ開けにかかる。堅牢なハッチも既に腐食し、私が体重をかけると、周囲の壁もろともぐらぐらと揺れた。頃合いをみて足で押すと、ハッチは内側にぼこりとへこんで、そのまま中へと落っこちてゆく。ひと呼吸おいて、

暗闇の奥から無数のごみが舞い上がってきた。私は気にせず、中へ入る。

そこは死者の雑居房だ。肉が落ち、骨だけとなった難破者の死骸が、ばらばらになつて折り重なっている。5人、6人、いや……。数えてなんになるだろう。人の形をとどめているものは希だ。水中ライトの光を受けて、虚ろな髑髏は眩しそうに目をそらした。小さな魚が壁に沿つて銀鱗を閃かせている。私は脆い床を踏んで、船室の奥のドアに進もうとした。そのとき、ひととき大きな魚が私の目の前を横切った。いや……。

それは、床から舞い上がったごみの一枚、何かの樹脂でできたポイントカードだった。

もちろん「みちのくラーメン わらべうた」のカードだ。

私は建物の上のほうから、灰色の街路を見下ろしている。汚いガラス越しに見える町並みは暗く翳つて、いまにも大雨が落ちてきそうな気配だった。道にはもう人っ子一人いない。

左手のほうに、一区画を占める竹藪がある。そこに二匹の犬がいるのに気がついた。犬たちはしきりに藪に潜つては、また現れてを繰り返している。あそこに何かあるのだろうか。すると、二頭の犬が急にぴんと耳を立てた。

街路の右手から中年の女性が歩いてくる。どこかからの帰りだろうか、太り気味の体に、ブルーチーズのようなワンピースが華やかな色を添えている。片手に黒いハンドバッグ、もう一方の手には大きな紙袋を抱えていた。

女性がちょうど正面に来たとき、にわかに犬どもが藪から走り出した。女性は少し驚いた様子だったが、犬が横を駆け抜けられるよう、すいと動いて道を空けた。だが、犬たちは女性の前で足を止めると、つま先立ちに跳ねながら、激しく相手に吠えかかった。

女性はハンドバッグを振り回すと、半身に警戒しながらその場を立ち去ろうとした。ところが、振り回したハンドバッグに犬の一頭

が噛みついた。女性は何か叫び声を上げ、紙袋を取り落として、両手でハンドバッグの紐を掴む。革紐がぴいんと伸びて、腰の引けた女性と腰を落とした犬との間に、二本の平行線を描いた。

この隙を見逃さず、もう一頭の犬が、女性のふくらはぎに喰いついた。女性はハンドバッグの紐を放し、犬の頭を殴ろうとする。だが、目をむいた犬はその一撃に耐えた。ハンドバッグを奪った犬はすかさずそれを地面に落とし、今度は中腰になった女性の肘に食らいつく。そのまま顎の力で中肉の腕にぶら下がった。パニックに陥った女性が悲鳴を上げる。

助けなければ！ 私は窓辺を離れて、階段を探した。そこはかつて自分の通った小学校だった。私もいつの間にか小学生に戻っていた。階段を駆け下りると、踊り場の窓から犬に襲われる女性の姿が見えた。

下の階に駆け下りるとき、女性はまだ両足で立って、必死に犬らを振り払おうとしていた。

その下の階に駆け下りるとき、女性は膝をついていた。ふくらはぎに喰いついていた犬は、顎の位置を喉笛に変えていた。

その下は一階だった。ここからはもう女性の姿は見えない。私は校舎の前庭に駆け出そうとして躊躇した。校門を出たとき自分一人ならば、今度は私が襲われるかもしれない。

だが、校舎の反対側から、大人の男が何人か、校門に向かって駆けてゆくのが見えた。私はそのあとに続いた。

路上に倒れた女性の周りには、まっ黒い血だまりができていた。投げ出された紙袋から、なにか四角い紙包みが飛び出している。男たちが近づくと犬は犠牲者を離れ、耳を伏せて激しい唸り声を上げた。だが、果然怯まない男らを見て、犬はもときた竹藪の方に退散していった。大人たちが何か叫んでいる。私はその全てを戦慄して見ていた。と、黒いハンドバッグの口が開いて、血溜まりの上に何かを吐き出しているのが見えた。その大きさと形から、私はそれが何であるのか、すぐに分かった。

「みちのくラーメン わらべうた」の割引券である。

私は目を覚ました。店の中は静まりかえっている。スープを煮込む古ぼけたヒーターだけが、ときおりカタカタと小さな音を立てていた。私は伸びをした。

カウンターの上に、からになったドンブリが置いてある。スープは半分残してあった。そういえば、さっきまでここに客がいたのだ。あたりを見回しても、代金を置いていった様子はなかった。私が寝込んだのをいいことに、またもや食い逃げされたのだ。

外は雨だった。昭和の頃から使っている古い暖簾はくすんだように黒ずんで、店の前に雑巾を垂らしたようになっていた。23時を回っていた。今日はもう店じまいでいいだろう。私はぐしょぐしょの暖簾を店内に入れると、それを乾かすためにテーブルの上に広げた。もう何が書いてあるのか全然分からない。

私はスープにガラを足し、水を加えると、加熱器の温度つまみを80度に調整した。スープは24時間煮込み続けるのである。洗い物を終えて、くしゃくしゃになったキャスターの箱から一本取り出す。備え付けのマッチで火をつけた。煙はやがて店の隅々にまで広がって、ヤニに汚れた壁に新しい薄膜を作るだろう。

不意に電話が鳴った。

「はい」

「あ。わらべうたさんですか？ 出前をお願いしたいんですが」

まただ。まただ。うちにかかってくる電話のほとんどは、この電話なのだ。

「違いますよ。番号をお間違えじゃありませんか？」

そういつて、有無を言わず電話を切る。二、三度続けてかかってくることもあるが、二回取することは絶対にしない。無駄なことだから。

「わらべうた」は、近所にあるらしいライバル店である。らしいというのは、正確な場所を私も知らないからだ。もともと、何度か

見たことはある。この界隈は路地が複雑に入り組んでいて、壁の向こうが一体どんな区画になっているのか、一向に分からない古い土地なのだ。こんなところにあるラーメン店なのだから、客が混同するのも無理はない。

いちど、行ってみたらどうだろう。ふと、そんなことを思った。

うちは定休日のない店だ。休んだところでもすることもないから、とにかく店は開くことにしている。客はあまりやってこない。固定客に至っては一人もいない。どうして暮らしていけるのか自分でも不思議だが、ともかくもどうにかなっているのである。ここで一日休んだところで、どうということはないだろう。

そうだ。明日、いつてみよう。その「みちのくラーメン わらべうた」に。

翌日の昼前に、私は店を出た。記憶を頼りに狭い路地を徘徊する。だが店は見つからなかった。やがて私は交番の前に出た。そこで警杖を突いた若い警官に道を尋ねることにする。

その店は、私の店と同じ区画にあるようだった。壁を接しているかもしれないほど近くだ。だが驚くほどのことでもない。こういう土地では、実際にどのような建物と軒を交えているか、把握することすら難しいものだ。

やがて、それと思しき店の前に出た。暖簾は黒ずんで、なんと書いてあるか判読できない。昼時だというのに店内は暗かった。私は入り口の取っ手に手を掛けた。が、それはガタガタ揺れるだけで開かなかった。休業日なのだ。

暖簾を下ろしたまま、本日休業しますの告知もしないで休んでいるのか。おまけに定休日なども書いていない。私は怒りを覚えた。この数十分をどうしてくれる。この間にも、私の店には新しい客が来ていたかもしれないのに。

私は汚れきった店のガラスを透かして、そつと中をのぞき込んだ。

カウンターのの上に、だらしなくタバコの箱が放り出してあった。

店に帰ると、ドアの前に置いてある絨毯が丸まっていて、誰か留守中の訪問者が踏んだのだと知れた。客だったかもしれない。残念なことだ。私は「みちのくラーメン わらべうた」の主人に対し、深い憤りを感じた。

その日、ほかに客は来なかった。ふと気づけば、スープに足すガラが切れている。前回注文したのはいつだったろう。私は記憶を辿ろうとした。何も思い出せない。やがて頭痛を感じはじめた。いつもこうなのだ。

いらついた私はスープ鍋のふたを開けると、しゃもじで荒っぽく掻き回し始めた。白く不透明なスープの底で、重い骨の堆積がしゃもじに絡みついた。

私はいらついている自分にいらついた。少し落ち着こうとして、軽く鼻歌を歌い出す。それは名前も忘れた古いメロディ、わが古里のわらべうただ。歌にあわせてしゃもじを回す。

重い鍋がごとごとと揺れ、下手くそな私の歌に、あくまでも不規則に唱和した……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6579h/>

みちのくラーメン わらべうた

2010年10月8日15時17分発行